現地説明会資料
令和元年８月１０日

都谷（みやこだに）遺跡

Ⅰ.調査の概要

今回の調査成果のポイント！
①初の発掘調査で、段状遺構を検出
②さまざまな地域の特徴を持つ土器が多数出土

1.調査名　　都谷遺跡 第４次試掘調査
2.所在地　　大洲市新谷
3.調査期間　令和元年６月～８月（予定）
4.調査面積　約 24.5 ㎡（第４次分）
5.調査体制　調査主体：大洲市教育委員会 ／ 調査指導：下條信行 愛媛大学名誉教授（考古学）
6.調査の目的

大洲市新谷の都谷遺跡では、昭和初期から現在に至るまで、多数の弥生土器や石器が採集されてきました。しかし、これまで長年の間、遺構は未発見のままでした。このため、平成 28（2016）年度より、遺跡範囲の確認や、遺構の検出を主な目的として、試掘調査を断続的に実施しています。

Ⅱ.都谷遺跡の位置と環境

都谷遺跡は、大洲盆地の北辺部にあり、矢落川と都川とに挟まれた尾根の斜面に広がる弥生時代の遺跡です。標高は約 70ｍで、都川谷部にある都集落との比高差は約 50 ～ 60ｍにも及びます。

都谷遺跡の周辺では、弥生時代の遺跡が多く発見されています。矢落川の河床中にある**矢落川遺跡**、矢落川上流側では**田合遺跡**、**底なし田遺跡**、矢落川と肱川との合流地点付近では**慶雲寺遺跡**など、矢落川や肱川沿いに弥生時代の遺跡が多く分布しています。

Ⅲ.都谷遺跡の発見とこれまでの経緯

この都谷遺跡は、昭和の初め、地元の熱心な郷土史家らが発見したと思われます。昭和３（1928）年には、著名な人類学者である鳥居龍蔵氏が、５日間にわたって大洲盆地を視察した際、この都地区と周辺を調査したことが記録に残されています。次いで昭和５（1930）年には、國學院大学教授などを歴任した樋口清之氏が、弥生土器や石斧の発見を報告しています。これが、都谷遺跡における最初の遺物発見の報告となりました。

昭和 39（1964）年には、愛媛大学教授であった松岡文一氏が、それまで採集されてきた土器のなかから共通する特徴を抽出し、この特徴をもつ土器の一群を「都谷式土器」と命名しています。その後も土器などが多数採集されており、長井數秋氏らが採集資料について断続的に報告しています。

しかし、大きな課題も残されていました。多種多様な遺物は採集されるものの、これまで発掘調査はおこなわれておらず、人間が生活を営んだ痕跡（建物跡、溝、柱穴…など）である「遺構」が検出されていませんでした。また、遺跡の正確な位置についても、長らく混乱した状態が続いていました。

今回の一連の試掘調査は、平成 27（2015）年の冬、地元の方が採集した資料や証言が契機となって開始されました。遺跡が発見されて 80 年以上が経過し、ようやくその実態が明らかになろうとしています。

Ⅳ. 今回の調査成果

試掘調査は、大きく 4 カ所の範囲に分けて実施しています。このうち、「B 区」と設定した地点で、遺構を発見するなど大きな成果が得られました。

①段状遺構の発見

段状遺構とは、山の斜面を人工的に削って平坦な面をつくりだし、人が生活を営んだ痕跡です。大洲市内では、石斧製造址とみられる村島宮の首遺跡で、多くの段状遺構が発見されています。都谷遺跡では、B 2 トレンチで検出し、段状遺構のほぼ全体が残されていました。

検出した段状遺構は、東側の谷部に向かって開かれており、平面形は半円状で、幅 8.2m以上、奥行 3.2m以上を測ります。現在、遺構内を調査中ですが、ピット（柱穴）を少なくとも 13 基検出し、一部で排水溝と考えられる溝を検出しました。

②特徴的な遺物の出土

今回の調査では、まとまった量の土器と石器とが出土しました。なかでも、特徴的なものを紹介します。

【土器】

都谷遺跡で出土した土器の主な器種は、甕、壷、高坏です。また、ジョッキ型土器もわずかに出土しました。

南予から高知県にかけて分布する「西南四国型土器」や、松山平野の影響を受けた土器も多く出土しています。また、瀬戸内海沿岸で盛んにつくられる「凹線文土器」のほか、九州やその周辺地域の影響を受けたと考えられる土器も出土しており、さまざまな地域との交流が考えられます。

【石器・石製品】

出土した石器は、緑色玄武岩製の伐採石斧、板状石斧と、その未成品（つくりかけ）や剥片（石クズ）が多くを占めます。また、赤色珪質岩の剥片も出土しているほか、大小の砥石が出土していることから、周囲で石器が製作されていた可能性があります。こうした石器などは、村島宮の首遺跡で出土するものと石材や形状が似ており、遺跡間の関係性が注目されます。

さらに、木材加工用と思われる柱状片刃石斧やその未成品、磨製石剣（柄の部分）も出土しています。とくに磨製石剣は、発掘調査としては南予で初めての出土となりました。

Ⅴ. まとめ

今回の調査では、遺跡の発見から 80 年以上の歳月を経て、初めて遺構の存在を確認することができました。段状遺構に伴う土器がわずかであるため、時期の検討は難しいのですが、おおよそ弥生時代中期中葉（約 2,100 年前）～後葉（約 2,000 年前）のものと考えられます。また、この段状遺構は、村島宮の首遺跡で検出されたものと規模や形状が似ており、弥生時代中期の大洲盆地の居住形態を復元するうえで重要な成果となりました。

また、西南四国型土器のみならず、松山平野や九州とその周辺地域の影響を受けた土器が出土しており、近くを流れる肱川を介した様々な地域との交流が想起されます。

ただし、遺物の出土量から想定すると、B 区にはこのほかに複数の遺構が存在した可能性があります。また、量は少ないものの、B 区以外でも遺物が出土しており、将来的にはさらに範囲を広げて調査を進めてゆく必要があります。全国的にも数少ない石斧製作址と想定される村島宮の首遺跡とあわせ、大洲における弥生時代集落の実態を解明するうえで、今後の調査に期待がかかります。

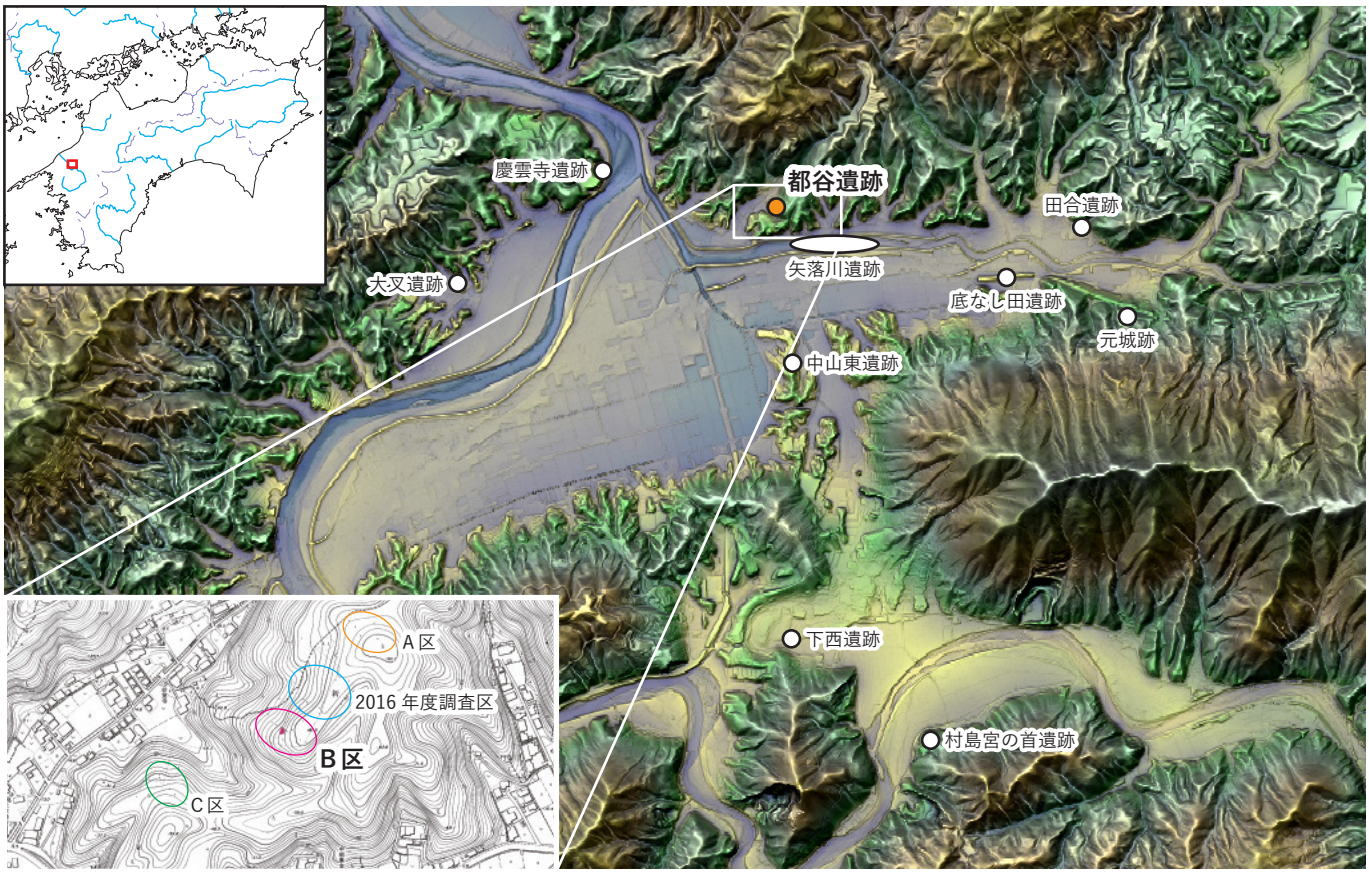


図１　都谷遺跡の位置と大洲盆地の主な弥生時代遺跡（カシミール 3D より作図）

①遺物出土の様子

②段状遺構検出の様子

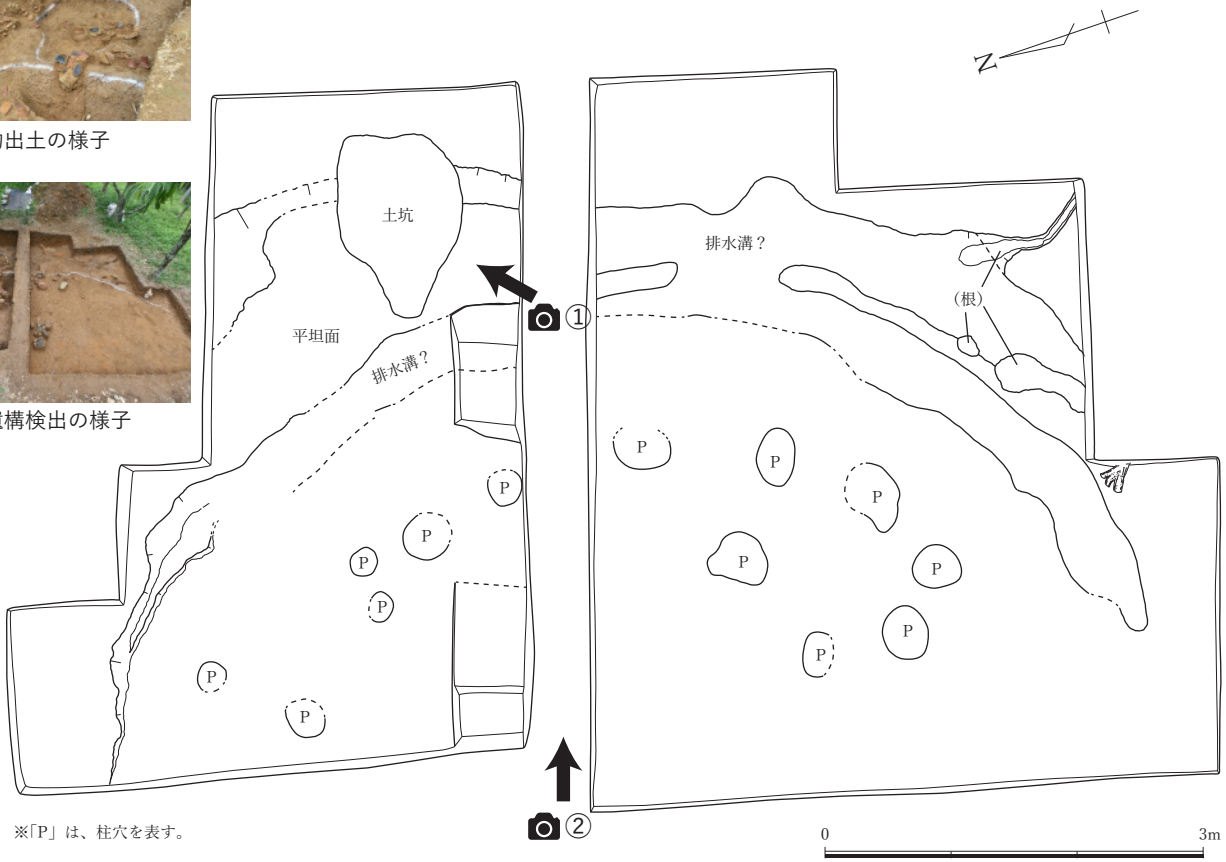
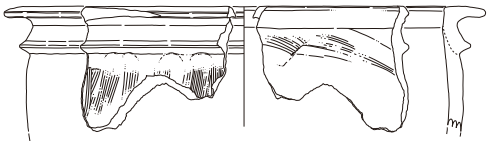


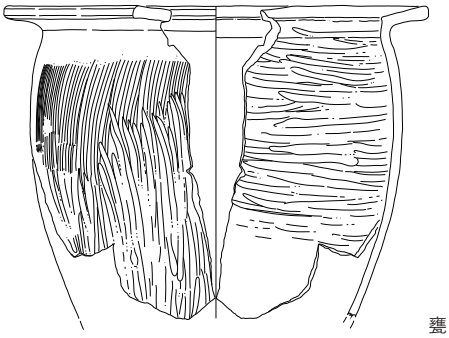
図２　B２トレンチ平面図（Scale 1:60）　※調査中につき、今後追加・修正が生じます。

九州やその周辺の影響を受けた土器



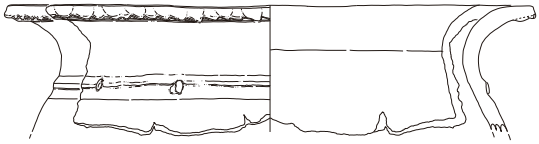
甕

中予の影響を受けた土器



甕

西南四国型土器



甕

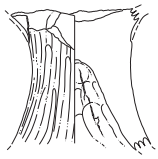
0 10cm

凹線文土器(瀬戸内海沿岸)

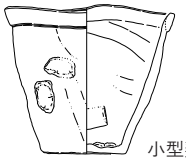
壺

そのほか特徴的な土器

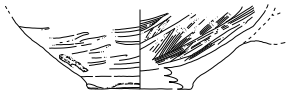
高坏(坏部)



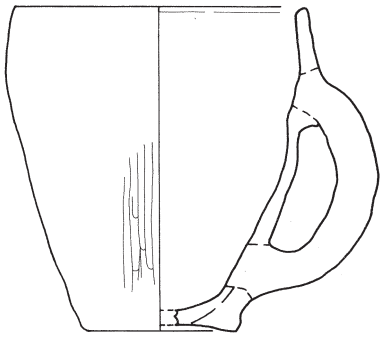
高坏(脚部)



小型甕

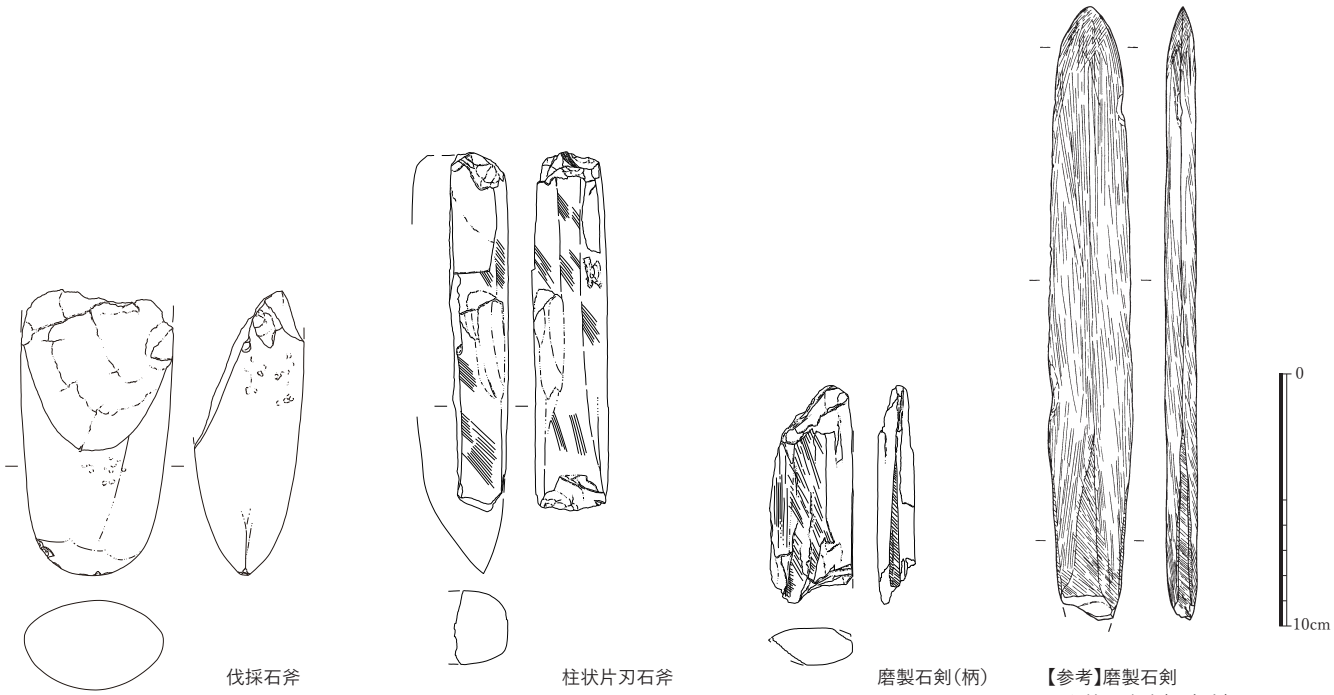


ジョッキ形土器(底部)



【参考】ジョッキ形土器
―祝谷六丁場遺跡(松山市)

図3　B2トレンチ出土の主な土器 ※整理中につき、今後修正が生じます。



伐採石斧

柱状片刃石斧

磨製石剣(柄)

【参考】磨製石剣
―久枝Ⅱ遺跡(西条市)

図4　B2トレンチ出土の主な石器・石製品 ※整理中につき、今後修正が生じます。